# 私の履歴書

釜本邦茂 ⑪

## ヤンマーへ

サッカーに明け暮れながら1967年3月に早大を卒業、4月からヤンマーディーゼルで社会人生活を送ることになった。

4年で卒業できたのは周りの理解のおかげだ。合宿中の講義で代返をしてくれる者、ドイツ語の試験で「ドイツ遠征日記」を日本語で書いたら単位をくれた教授。早大闘争で3年の期末試験が吹き飛んだのは神風が吹いたと思った。1、2年で落としたものも含め履修すべき単位がそこで全部取れてしまった。

就職は三菱重工に入るつもりだった。親友の森孝慈が兄・健兒さんがいる同社でプレーを続けると聞いて「おれも」と考えた。三菱の会社で長年お世話になった父の意向にも沿える。東洋工業や日立の誘いには断りを入れた。

早大4年の7月、欧州遠征に旅立つ前、川本泰三さんに大阪に呼ばれた。川本さんはベルリン五輪でスウェーデンに勝った時のシュートの名人といわれたFW。引退後は代表監督も務めた関西サッカーのボスだった。私に「オマエはゴール前で目立ちすぎ。もっと消えなあかん」と後の覚醒につながるヒントをくれた早大の大先輩でもあった。

## 大先輩の勧めで入社

### 練習法を工夫 チームを強化

帰阪すると引き合わされたのがヤンマーの山岡浩二郎専務だった。「外国から選手も入れて強化する。会社の全面バックアップで日本一のチームにする計画がある」。ほとばしる情熱がすごかった。別れた後、川本さんに「どうや」と聞かれた。「ヤンマーを受けます」と答えていた。

社会人でも一緒に、という森との約束を破るのは心が痛んだ。政経学部に入るため1浪した森とは大学で同級になったが、年は一つ上で包容力ある森に私は甘えるところがあるのかもしれない。最後の天皇杯で中盤を組んで優勝した時も「俺は戻ってこないから」と宣言してきつい守備の仕事を全部やってもらった。

ストライカー気質の私と違い、攻守をつなぐリンクマンの森は「人のために自分がある」という人間だった。心変わりを伝えた時も「サッカーをやるならいいさ。とにかく日本サッカーのために頑張ろうや」と励ましてくれた。

ヤンマーでは兵庫県尼崎市の工場に勤務した。初任給は手取りで2万7千円。一般社員に「ほんまはもっともらってるんやろ」と疑われたが、会社を辞めるまで給与面で特別扱いを受けたことは一切なかった。契約金もない。大学時代、ヤンマー人事部の人が持ってきたのは老舗の塩昆布の土産だけだった。

67年の日本リーグ開幕戦で前年度の最優秀選手の表彰を受けた

入社して最初の3年は機械計算課で仕事のまねごともした。コンピューターが導入されるから勉強が必要となった時に「カタカナ読むの苦手です」と断ったら「もう仕事はせんでええ」となった。それからは昼まで部室でコーチの加茂周さん（後の日本代表監督）らと「こういう練習をしよう」などと語らい、午後から練習という態勢になった。練習時間が長くなったことはヤンマーが強豪に追いつく原動力の一つになったと思う。

とはいえ、最初にグラウンドに出た時は周りの技術の低さに消沈した。早大時代は森や松本育夫さん、二村昭雄さんらシュートに専念させてくれる頼もしい仲間がいた。「どうすんねん」。途方に暮れかけた時、ブラジルからすごいヤツがやって来た。日系2世のネルソン吉村だった。

（日本サッカー協会顧問）

掲載日 2016年2月11日 日本経済新聞 朝刊 40ページ ©日本経済新聞社 無断複製転載を禁じます。